

先人が遺した宝もの

Kyushu Civil
Engineering Heritage

03

本シリーズは、地域の発展、産業、風土・文化、暮らしと土木遺産との関わりに焦点を絞り、地域をよく知る人物へのインタビューを柱に、有識者の声(Voice)も併せて、“地域の宝もの”である土木遺産の魅力をより深く紹介していきます。

南九州の交流拠点都市



龍峯山から見晴らす干拓地と八代海に注ぐ球磨川

八代をめぐる



日本遺産の認定を契機に、その魅力が再発見される 球磨川河口の都市・八代

熊本県南部、球磨川河口に位置する八代には、石造りの建造物が数多く現存しています。名石工を輩出した“石工の郷”に息づく石造りの文化が見直され、「日本遺産」に認定されたことによって、改めて地域の魅力を再発見する契機となっています。

Interview

インタビュー

八代市役所
経済文化交流部 文化振興課
課長 米崎 寿一 さん



日本遺産『石工の郷 八代』パンフレット



日本遺産の認定を達成するために、 どのように苦労されたのでしょうか？

日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを、文化庁が認定するものです。八代市では令和2年(2020)6月、日本遺産「八代を創造した石工たちの軌跡～石工の郷に息づく石造りのレガシー～」が認定されました。私はこの案件を担当しましたが、八代市ならではの独自のストーリーを練り上げていくのに、とても苦労しました。

八代地域にはめがね橋や干拓樋

門、棚田の石垣など、石造りの遺構が数多く受け継がれていますから、それぞれの地域の歴史、果たしてきた役割、時代背景を調べ、関連付け、物語としてまとめていくという膨大な作業でした。

ところが、ようやく認定を果たした年の7月、球磨川豪雨災害が発生し



明治2年(1869)、名工橋本勘五郎によって架橋された笠松橋

たため、日本遺産の認定をアピールする予算が確保できません。そこで、ふるさと納税を活用したクラウドファンディングを立ち上げたところ、2億円を超えるご寄付を頂戴し、パンフレット作成や体験ツアーなど、いろいろな広報活動を展開することができました。

八代の日本遺産認定で、土木遺産 はどのように位置づけられていますか？

日本遺産での八代のストーリーは石工の郷であり、八代周辺の土木遺産を代表するめがね橋や、コンクリートが普及する前の時代に築かれた干拓樋門は、日本遺産の構成文化財に欠かせない存在となっています。

石造りの遺構の中で注目される八代城ですが、八代で切り出した石灰岩を使って壮大な石垣を積み上げ、堀をめぐらしています。記録がないため、この城を手掛けた石工の名は分かりません。しかし、加工が難しいとされる石灰岩を、自在に使いこなす石工の確かな技が、ここにも息づいています。



八代城跡の石垣

八代平野の干拓事業の歴史についてお聞かせください。

球磨川の河口に広がる八代の海は、干満の差が大きく、遠浅の海が広がっています。古くから自然の陸地化という現象は見られましたが、本格的な干拓事業は江戸時代に始まり、明治・大正・昭和時代まで続けられています。

その最盛期は1800年代の細川藩の時代、鹿子木量平・謙之助の親子が活躍したところです。野津手永※1の惣庄屋に任ぜられた量平は、謙之助を新地開発の先進地である備前・岡山に派遣し、技術を学ばせます。同時に自力で資金を確保して文化2年(1805)、百町※2新地の干拓を成し遂げます。その手腕を評価した細川藩は資金を準備し、四百町新地の干拓を命じます。量平は謙之助が学んできた備前の新技術を取り入れ、地元の野津石工の棟梁・三五郎とともに文政2年(1819)、見事に四百町新地を完成させます。さらに、わずか2年

後の文政4年(1821)、広大な七百町新地を竣工させました。この干拓にはめがね橋で知られた種山石工や天草の入夫も協力し、地域を挙げた一大土木事業として取り組まれたものでした。その後も干拓事業は長期に渡って継続され、実に八代平野の2/3が干拓によって生まれたものです。

※1 郡と村の間に設けられた細川藩独自の行政組織であり、その長である惣庄屋にはある程度の自治権が認められていました。
※2 百町=約100ヘクタール

八代が石工の郷として発展してきたのには、どのような要因があるのでしょうか？

八代海の石灰岩、種山の溶結凝灰岩、天草の砂岩など、周辺に多彩な石材が豊富に産出する八代地域では、橋や城郭、干拓の堤防、樋門、水路の建設などで石造りの技が磨かれ、種山や野津に石工の専門集団が生まれ、幾多の経験が蓄積されてきました。

例えば、国宝の通潤橋を設計した名石工の丈八は橋本勘五郎と名を改め、明治政府から招かれて上京の後、明治6年(1873)、首都・東京では初の石造アーチ橋「萬世橋」を完成させ、肥後石工の名を不動のものとし、欧米の技術者が土木工事を指揮した文明開化の時代、首都の要衝を郷土の技術が支えたことは、現代の私たちが誇りにしていきたいものです。



石造りの歴史を紹介している石匠館

【八代の歴史と市政(近世～現代)】

- 元和8年(1622) 加藤正方によって八代(松江)城を新築。
- 寛永9年(1632) 加藤氏改易後、細川三斎(忠興)が入城。
- 正保3年(1646) 三斎没後、筆頭家老松井興長が八代城主となる。これ以後、明治に至るまで松井氏が代々在城。
- 文政5年(1821) 江戸時代、肥後国最大の干拓事業である七百町新地(鏡町)の干拓が行われる。
- 明治5年(1872) 蛇籠港(八代港発祥の地)完成。
- 明治29年(1896) 九州鉄道が開通し八代駅が開業。
- 明治23年(1890) 日本セメント(株)八代工場操業開始。
- 大正5年(1916) 八代港が国の定める指定港湾となる。
- 大正13年(1924) 九州製紙(株)[現:日本製紙(株)八代工場]創立。
- 昭和12年(1937) 日曹人絹パイプ(株)[現:興人フィルム&ケミカルズ(株)八代工場]操業開始。
- 昭和14年(1939) 昭和酒造(株)[現:メルシャン(株)八代工場]製造開始。
- 昭和15年(1940) 八代郡八代町、太田郷町、植柳村、松高村が合併し市政施行、八代市となる。
- 昭和34年(1959) 八代港が国の重要港湾に選定。
- 昭和50年(1975) YKK AP(株)九州製造所操業開始。
- 昭和55年(1980) 九州縦貫自動車道八代インターチェンジ開通。
- 平成元年(1989) ヤマハ八代製造(株)[現:ヤマハ熊本プロダクツ(株)]舟艇事業開始。
- 平成16年(2004) 九州新幹線が部分開通。新八代駅開業。
- 平成17年(2005) 八代市は八代郡内の坂本村、千丁町、鏡町、東陽村、泉村と合併。
- 平成23年(2011) 博多ー新八代間の営業運転が始まり、九州新幹線が全線開業。
- 平成29年(2017) 八代港が国の「国際旅客船拠点形成港湾」に指定。
- 令和2年(2020) 国際クルーズ拠点「くまモンポート八代」供用開始。

※上記年表は八代市HPと各会社HP、国土交通省九州地方整備局熊本港湾・空港整備事務所HPを参照して作成

Column

コラム



鹿子木 量平
(1753年～1841年)



岩永 三五郎
(1792年～1851年)

「干拓の父」と呼ばれ、惣庄屋として百町、四百町、七百町と相次ぐ干拓事業を主導しました。その業績により文政神社が創建され、今も郷土の人々に愛されています。

個人蔵
(写真提供:八代市立博物館 未来の森ミュージアム)

めがね橋をはじめ堤防や干拓樋門など、石造りの技に優れ、七百町干拓の業績によって苗字を許されます。後に薩摩藩に招かれて壮麗なめがね橋を架橋しています。

Voice

ボイス



現在の日本製紙(株)八代工場

球磨川と八代港、そして未来へ

八代市立博物館 未来の森ミュージアム
審議員兼学芸係長 山崎 摂 さん

ことで、国内外からの訪問客を快くおもてなしできるようにと期待しています。

江戸時代に難所が開削され、球磨川は物資輸送の大動脈として活躍

球磨川では小舟による物資輸送は古くから行われていました。人吉から八代までは巨岩の多い急流が続くため、大きな船の通行は難しく、江戸時代の寛文2年(1662)、人吉藩の商人・林正盛が難所を開削したことで、ようやく船の通行が可能となり、八代と人吉・球磨地方を結ぶ大動脈として活躍します。流域には通行する船の監視と税金徴収のため、7カ所に番所が設置されました。つまり、それほどまでに船運が盛んに行われたということの証です。



昭和13年頃の球磨川、萩原橋より上流を望む
出典：国土交通省九州地方整備局・球磨川下流域の土木治水史についてHPより

3つの城と松井家の統治によって、八代ならではの文化が醸成される

八代は古くから水陸の交通拠点であり、歴代の統治者は球磨川の河口周辺に城を構えました。南北朝時代に古麓城、安土桃山時代に麦島城、江戸時代に八代城と、3つの城が築かれ、それぞれに城下町が整備されたことで、この地の政治・経済・産業の基盤が確立されていきます。

さらに細川家の家老であった松井家が八代城に入城し、220年に渡って統治したことにより、肥後古流の茶道、金春流の能楽を継承するとともに、伝来する古文書、絵画書跡、美術工芸品など、江戸期の文化を伝承しています。これらが八代の文化の根底に流れ、現代にまで受け継がれているのです。日本遺産の認定などを通じて、地域の人々が八代の魅力に接し、誇りを抱く

Tourist information etc.

観光情報など



八代城跡

加藤家の重臣・加藤正方(まさかた)が元和8年(1622)に築いた城です。落雷で天守は焼失しましたが、天守台、本丸跡の石灰岩の石垣がそのまま残り、迫力ある姿を見せています。



八代神社(妙見宮)

今から1300年前、妙見神が想像上の動物「亀蛇(きだ)」に乗って八代の地に上陸したとされ、妙見宮が創建されました。明治時代の神仏分離令によって八代神社に改称されました。



八代市立博物館 未来の森ミュージアム

八代城主を助めた松井家由来の美術・工芸品をはじめ、妙見祭資料、八代城跡の模型など、八代の歴史と文化に触れられる博物館です。郷土の豊かな魅力を紹介する多彩な講座・講演会なども開催されます。 ※改修工事のため、令和8年(2026)3月<予定>まで休館中です。

貿易港として発展してきた八代港 周辺は、陸上交通網との連携により、さらなる躍進へ

球磨川河口に発達した八代港は、平安時代から日宋貿易の拠点となり、戦国時代には渡唐船の遭難記録が残るなど、古くから貿易港として発展してきました。江戸時代の熊本藩は、年貢や物資を集約する港湾拠点として、八代町を肥後五カ町の1つに選び、重視しています。



明治23年頃の日本セメント八代工場
出典：国土交通省九州地方整備局・球磨川下流域の土木治水史についてHPより

明治時代に係留施設が整備され、近代的な港湾となった八代港の周辺には、九州初のセメント工場、製紙工場などが次々と進出し、南九州随一の工業都市へと発展します。その後も九州自動車道、南九州西回り自動車道、九州新幹線が相次いで開通し、陸上交通網と海上輸送の連携により、南九州の発展を牽引してきました。

八代市内では新たな県営工業団地の整備が計画され、未来に向けて新産業の創出と交流拠点都市としての躍進が期待されています。

くまモンポート八代
世界最大級のクルーズ船(22万トン級)が接岸できる岸壁と旅客ターミナルを備え、周囲には「くまモン」をテーマにした公園が整備されています。

日本一の生産量を誇る名産品『トマト』

八代地方は全国一の生産量を誇る冬春トマトの産地です。塩分濃度が高い干拓地で収穫される塩トマトは、糖度が高く、果物並に甘いのが特徴です。

約500年前、始められた『い草栽培』

畳表の材料となるい草の栽培は、八代では約500年前から始められたとされ、全国一の生産量と品質の高さを誇っています。

八代市観光ポータルサイト
きなっせやつしろ



Kyushu Civil Engineering Heritage

土木遺産 in 九州

土木遺産 in 九州



郷土の営みを支える頼もしい存在



干拓史に輝く10連アーチの石造樋門【郡築三番町樋門】

明治38年(1905)に完成した郡築干拓には、石造樋門が甲、乙、丙と3カ所ありましたが、この甲号だけが現存しています。高さ5.5m、天端の幅約33m。堂々たる10連アーチの内部は、赤煉瓦で仕上げられています。



PC橋を張り出して架橋する斬新な工法【夕葉橋】

球磨川を渡る国道3号に架かるコンクリート長大橋であり、完成は昭和39年(1964)です。長径間のPC橋を張り出して架設していくディビダーク工法は、橋の下に支保工を組むことなく建設できるため、その後、広く普及していきます。



土木の達人・清正が築造した利水・治水施設【萩原堤防・遙拝堰】

熊本藩の初代藩主・加藤清正は、球磨川の八代平野部の堤防・堰を築き、利水と治水に役立てました。現在の遙拝堰はコンクリート堰に改修されましたが、元は両岸から上流に向かって「八」の形の石を置き、流れる水を水路に引き入れ、広大な農地を潤しました。



八代妙見祭

江戸時代から続く八代神社の秋の大祭です。神幸行列では妙見神の乗り物とされる亀蛇(きだ)や獅子、笠鉾が並び、観客を魅了します。

やつしろ 全国花火競技大会

球磨川河川緑地に全国有数の花火師が集い、その技を競い合う競技大会です。約1万5千発もの花火が、秋の夜空を華やかに彩ります。

復元された八の字堰

球磨川の遙拝堰(ようはいせき)の下流に令和元年(2019)、八の字の形状の堰が復元されました。アユなどの魚類の生息環境の改善につながっています。

写真提供：八代河川国道事務所